

とをいったあと、いつもなら帰り道でそれが思い返されて頭の中にしこりとして残るのだが、倉橋先生と「けんか」したあとは、かえっていい気持なのである。実際は「けんか」にもならないことだったのだが、帰宅するとよく、「今日は先生とけんかしてきたよ」と家内に冗談を言ったりした。

二、三回お邪魔をしている中に、先生の高弟になったような気持に溺れてしまった。月々に一回、先生を囲んでもっと若い学生も混えて放談会をしようと津守君と計画したこともあった。しかし、間もなく先生が耳を悪くされて、それが果せなかったのは、今以って残念でならない。その間にいつかは女子教育に大きな興味を持つようになっていた。

なお私の耳に残っているのは、先生の高い調子の声である。一と頃、雑誌「幼児の教育」のことで、先生からしばしばお電話をいただいた。そんなとき、普段の冗談を混えた話し振りとちがって非常に丁寧であって、受話機を持ったまま私は非常に恐縮した。その先生の声が、今もなお「ああ、平井さんですか」と耳元に呼びかけてくる。

(お茶の水女子大助教授)

倉橋さんを思う

藤本 萬治

倉橋さんは、明治三十九年七月、東京帝国大学哲学科(心理学専攻)を卒業されました。私はその年の九月に、同じ哲学科(教育学専攻)に入学したので、学生時代には、倉橋さんを知りませんでした。倉橋さんを知ったのは、倉橋さんが東京女子高等師範学校の教授で、文部省の教授要目改正の委員になられた頃で、私は当時文部省図書館に勤めていて、要目改正に関係していましたので、その時分からよく知り合ったように記憶しております。

昭和二十年二月、私は東京女高師の校長に就任してから、倉橋さんと毎日顔を合せるようになり、親しく交際する機会を得ました。しかし、戦争が苛烈となってきた、勤労動員で学生は学窓から引離され各地に分散して勤労に従ひ、附属高

女の生徒は、新潟、山形両県に疎開し、附属小学児童は富山県に疎開し、倉橋さんの主事をしておられた附属幼稚園児は家庭に留まり、幼稚園は閉鎖の已むなきに至りました。倉橋さんは、こういう状態を世の終りのように嘆かれたようすで、私のところに辞表を出されて一身の進退を託されました。幼稚園教育を生命とされていた倉橋さんとしては、さもあるうとその心境はよく私にもわかりましたが、女高師にとって誇である先生を惜んで、退官を思いとどまられるよう懇願して、独断ではありましたが、倉橋さんの辞意を文部省に取り継ぎませんでした。

八月十五日終戦となり、長い悲壮な緊張もゆるみ、勤労動員も解けて学生は学窓にもどり、疎開生徒児童も各地から帰校するようになり、倉橋さんも諸先生と共に学校に帰って来られました。そのとき先生は頭髪をごく短かく刈っておられて、お元気には見えましたが、敗戦の申訳に髪を落されたのかも知れないと思いました。

昭和二十一年三月には、米国教育使節団が来訪し、次いで使節団の助言勧告によって、新日本の教育全般にわたって改革を行うために、教育刷新委員会が設けられ、倉橋さんは教育専門家としてその委員を命ぜられて、学校外において新教育の建設に大いに尽力されました。また一方では石川謙博士と共に戦後における女子教育の振興のために、「女子教育研

究会」を發起されて、広く女子教育関係の人々に呼びかけ、都内知名な教育家がこれに加わられて、連合国軍最高司令部の民間情報教育局(CIE)勤務のドクター・ホームス女史を招いて助言をきき新女子教育の在り方、方法等について研究協議しました。石川さんと倉橋さんがその会の世話をされました。その研究会で論究してきめましたことは、女子大学を設置すること、家政学を大学の研究科目とすることなど後の教育改革に関係する重要なとりきめをして、その結論を文部省や司令部に提出しました。

昭和二十二年、二十三年は東京女子高師が脱皮して新制大
学となる極めて困難な準備期でありました。その際に倉橋さんは、外では教育刷新委員会の委員として活躍され、教育刷新の嚮向をわれわれに伝えて下され、内では学部組織特に家政学部の建設に力を尽くしていただきました。

かような大きな転換期における倉橋さんの非常な努力が健康に障ったものか、先生は難聴を訴えられるようになり、小石川東大病院分院で治療を受けられたが、はかばかしくない模様で、次いで身体の衰弱が甚だしく、学校を引きつづいてお休みになるようになりました。附属高等女学校の中沢主事も健康な方であったが、戦時戦後の労苦で長く病床の人となっておられました。ところが倉橋さんはその職責から離れたら療養も思うようにできると考えられて、退官した

いと申し出られ、その辞意は相当に強いものでありました。しかし私はまた先生の引退を惜んで、何とかして新制大学の組織の中に加わっていただくと思いとめようとなりました。そうするうちに私は愛媛大学の方に転任することになり、倉橋さんのお申出を後任者に残して立ちました。私がこうした倉橋さんの意志にそわないことをしたことが倉橋さんを苦しめたであろう。また御病氣にも障ったであろうことを考えるて申しわけのないことを思います。爾来、東京を離れたことと多忙を極めたことのためにお見舞もできずうちずぎましたが、二十七年私は退官して東京に帰り、倉橋さんをお宅にお見舞しましたが、その時は病臥中でおめにかかれず、その後は一進一退の御容態と承っていました。が遂に打ちくつろいで昔の苦心談をすることもできずに、幽明相隔てるようになつたことは残念にたえません。終戦後の教育革新のあの難事業に学校の内外にわたつて尽瘁された尊いお働きに對して中心感謝すると共に、わが国幼稚園教育に對する偉大な功績を称えて倉橋さんを思う言葉とします。

(元お茶の水女子大学長)

偉大なる

幼稚園教育家

堀 七 蔵

倉橋先生は明治三十九年七年、東京帝国大学文科大学哲学科を卒業せられ、自ら求め、明治四十二年頃から東京女子高等師範学校附属幼稚園で幼児心理の研究に従事せられた。これが先生の幼稚園教育に足を踏み入れた第一歩である。そして大正六年十一月、東京女子高等学校教授に任ぜられて附属幼稚園主事となられ、大正八年十二月まで、幼稚園主事として活躍せられた。それから二年間の海外留学を終えて帰朝せられ、大正十一年三月より大正十三年十二月まで、二年九月、幼稚園主事として勤務せられた。そして三年間の附属高等女学校主事を経て、昭和五年十一月から昭和二十四年十二月退官せられるまで、実に十九年一月、専ら幼稚園主事として勤務せられた。それで、倉橋先生は前後三回、二十四年間